

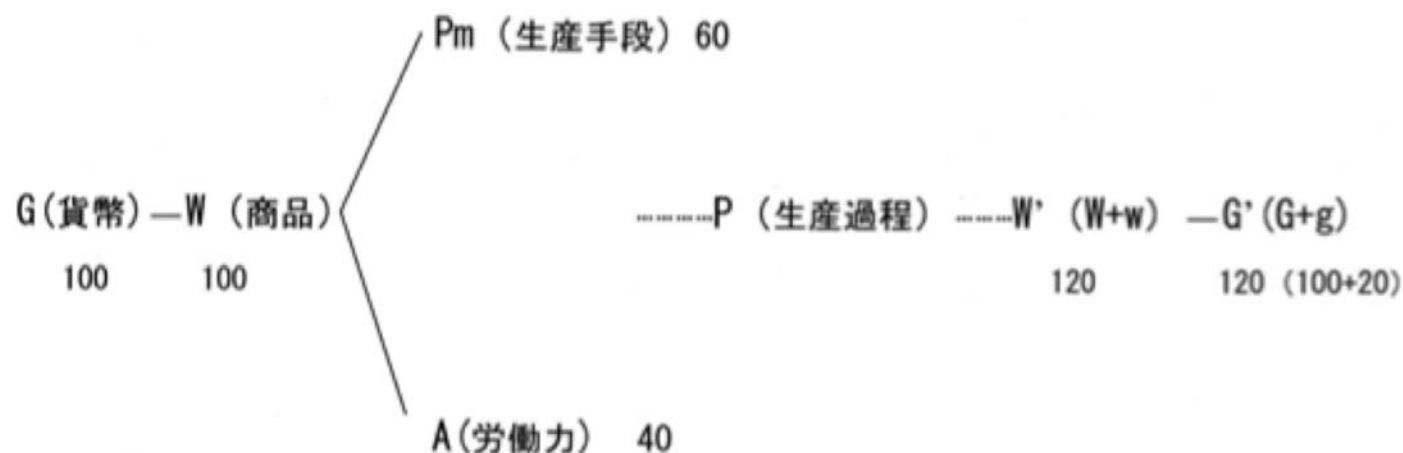
地球環境問題と企業



環境経営論(2回目)
足立担当

環境を配慮しない資本の運動

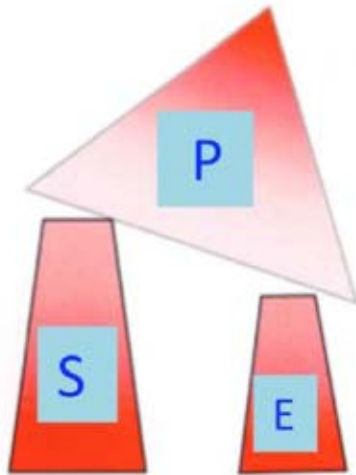
図3 環境を配慮しない資本の運動



- 1 運動の起点と終点は**貨幣**。運動の目的は利潤の獲得にある。
- 2 運動のプロセスで**自然環境への配慮は欠落している**。
- 3 貨幣の増殖は人間の富を増やし**見せかけの成長**を早める。
- 4 成長のスピード化は**自然環境への負荷**(否定的影響)を高める。

持続可能な成長とは何か

持続不可能な成長



P(利益) S(社会) E(環境)
赤い部分は負荷の増大を示す

$$P > S, E$$

利己的な成長

持続可能な成長

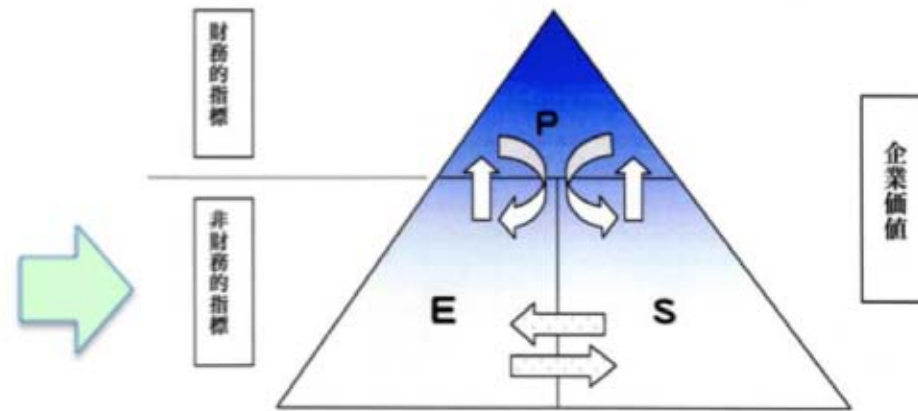


図3 持続可能な資本の運動

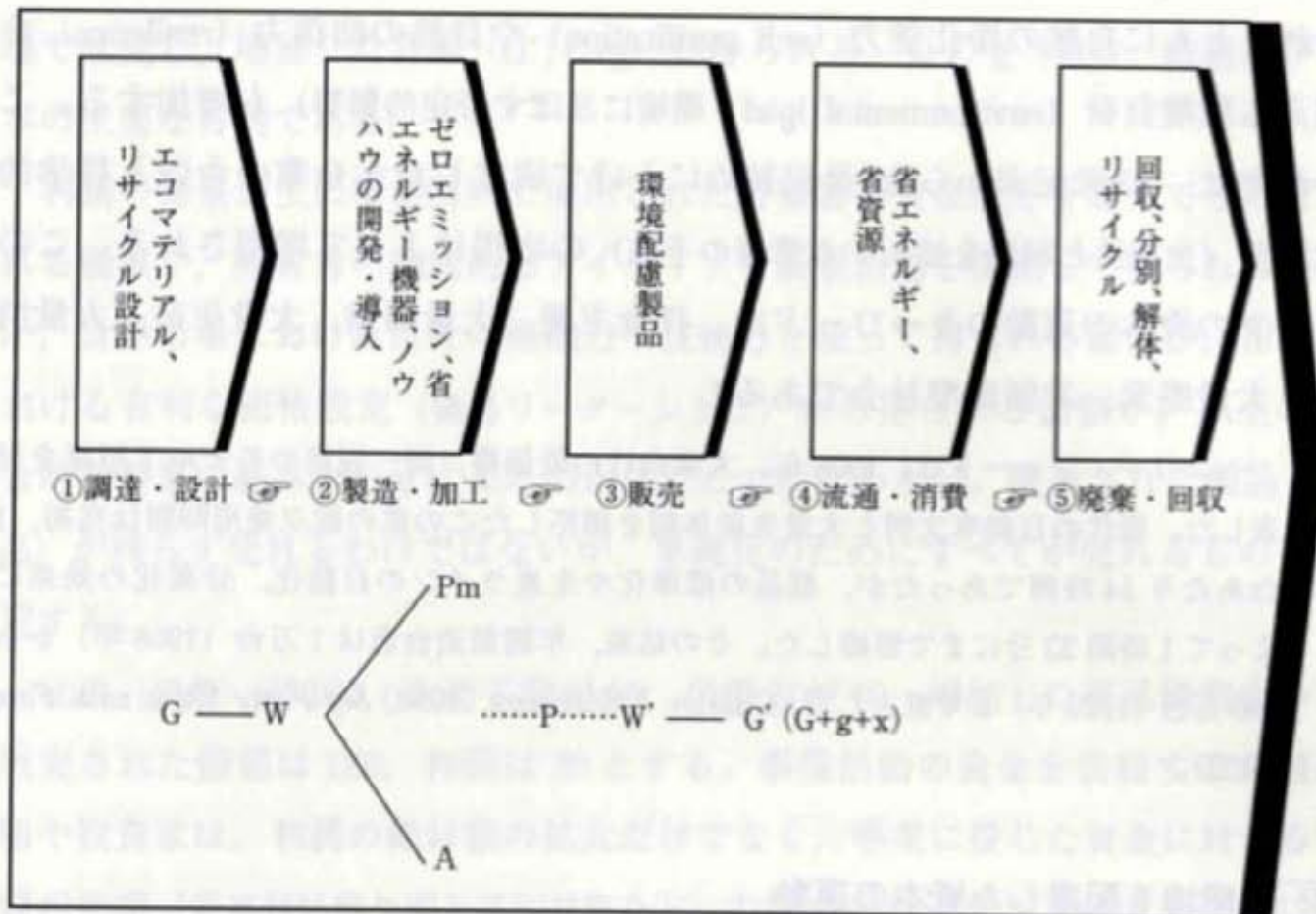
注釈) EとSの負荷を削減し社会的責任を果たした結果、
安定的で公正な利潤が得られ均衡ある発展が可能になる。
上向きの矢印はお金の流れ、左右の矢印は物質とエネルギー
の循環を表す。

$$P < S, E$$

社会・環境貢献型の成長

環境を配慮した資本の運動

企業の成長と環境対策が両立しているように見えるが、環境対策が優位に立つように自己点検する。



図序-4 環境を配慮した資本の運動

環境経営の歴史的展開

＜第1段階;公害対策の時代＞1960年代末～80年代

公害問題を典型とする企業の環境責任が問われ、End of Pipe(排ガス、排水などに含まれる有害廃棄物の規制)技術が主流となる。企業に公害対策課設置。

＜第2段階;環境管理の時代＞1990年代

ISO14000シリーズを典型とする環境マネジメントシステムの誕生と普及。企業に環境管理部設置。京都議定書(1997年)の成立により一気に普及。

＜第3段階;環境経営の時代＞2000年前後～

エコプロダクツ(環境配慮型製品やサービス)を本業に組み込み企業の成長戦略に位置づけ会社トップが主導する。環境経営のレベルが企業格付けの本格的な段階へ。エコビジネスが最大の産業へ移行する。環境経営はCSR(企業の社会的責任)に統合されて新しいビジネスモデルになろうとしている。

※製紙業界の再生紙への古紙配合率(リサイクル率)の表示を偽装したことから環境偽装という用語も生まれた。

環境経営の体系

- 1 環境経営の理念(ビジョンと戦略)
- 2 環境経営の組織と体制(責任の所在)
- 3 環境経営の領域
 - 省エネルギー
 - 廃棄物の削減
 - 化学物質管理
 - エコプロダクツの開発
 - 環境会計(環境活動の計量的把握)
 - 環境教育
 - 環境報告書(またはCSRレポート)
- 4 ステイクホルダーとの連携、協力
 - ※ CSRを偽装するケースもあり真贋を見抜く力が必要。
- 5 環境格付け
 - 日経環境経営度調査など。

